

早稲田大学 法学部 国語 講評

(総合分析)

出題形式	マーク式・記述式併用
試験時間	90分(古漢1問、現代文2問)
難易度	昨年より難化

(大問別講評)

一 古文。出典: 丈草『寝ころび草』。

(本文字数: 約 1300 字 = 昨年より約 700 字増加。設問数(漢文との合計): 10 = 昨年より1問増加。)

小問	難易度	コメント
問一ノ一	やや易	[文法問題] 傍線部の意味は自発。受身でとると前後の文脈とつながらない。
問一ノ二	やや難	[段落分け] かなり正確に読めていないと、第二段落の始まりが見つけられない。
問一ノ三	やや難	[文脈把握] 設問文の「内容として」に着目。ちだと単なる語義になってしまう。
問一ノ四	標準	[文脈把握] 傍線部の「たゆむ」「ひまなし」の語義と前後の文脈から判断する。
問一ノ五	標準	[文脈把握] 傍線部の直後の文脈から判断する。消去法でも判断できる。
問一ノ六	標準	[文脈把握] 古文常識を把握していないと正解を選びづらい。

一 漢文。出典: 王充『論衡』。

(本文字数: 約 260 字 = 昨年より約 200 字増加。)

問一ノ七・	易	[空欄補充] リード文と本文内容から容易に判断できる。
問一ノ七・	やや易	[文脈把握] 傍線部の「与」「輒」の用法、及び、前後の文脈から判断する。
問一ノ七・	やや難	[文脈把握] 傍線部直前の「此」に着目し、前の文脈から判断する。
問一ノ七・	やや難	[文脈把握] 傍線部の「双」を「ならば」と読めたかどうか。

二 評論文。「言語論」について。出典: 森本和夫『沈黙の言語』。

(本文字数: 約 3800 字 = 昨年より約 400 字増加。設問数: 8 = 昨年より1問減少。)

小問	難易度	コメント
問二ノ一	易	[漢字記述] 基本的な漢字である。
問二ノ二	やや難	[脱落文挿入] ホと紛らわしいが、直前が「言語生活」の内容を示しているものであることから判断する。
問二ノ三	標準	[傍線部説明] 傍線部の「そこ」で「欠けて」いるのは、「音」と「声」の区別である。
問二ノ四	やや易	[傍線部説明] 傍線部の直前の5行から判断できる。
問二ノ五	標準	[傍線部説明] 傍線部の直前の文から判断できる。ソは「吸収してしまう」が不適切。
問二ノ六	標準	[同義表現抜き出し] 2行前に同義表現がある。ただし、直前に「その」という修飾語があるためやや迷うかもしれない。
問二ノ七	やや易	[傍線部説明] 傍線部の直前より。消去法でもたやすいだろう。
問二ノ八	標準	[論旨合致] マは「夢の中でも語っている」が不適切。他の誤りの選択肢はいずれも後半が不適切。

三 評論文。「制度の土台にある概念」について。

出典：鬼界彰夫『「私」はなぜ存在するのか——ウイトゲンシュタインから原制度的世界へ』。

(本文字数：約 3500 字 = 昨年より約 600 字増加。設問数：6 = 昨年より2問減少。)

小問	難易度	コメント
問三ノ一・X	やや易	【空欄補充】「制度本来の役割」は、本文1～2行目にある。
問三ノ一・Y	やや易	【空欄補充】一つ目の空欄Yの5行前より、「第一の可能性」と対比的なものと分かる。
問三ノ二	易	【傍線部説明】他の選択肢はいずれも明らかに後半部分が誤り。
問三ノ三	やや易	【理由説明】直後の一文、及び、最終段落より判断できる。
問三ノ四	やや易	【傍線部説明】傍線部中の二つの指示語の指示内容をとらえる。
問三ノ五	やや難	【内容合致】正答の選択肢は後半が誤り。他は本文の趣旨の延長上にあると考えられる。
問三ノ六	やや難	【記述 = 本文要約】各意味段落の主旨をおさえて、それらをつなげればよい。

〔総合コメント・今後の指針〕

昨年のような古漢融合ではなく、漢文が半ば独立した形式で出題され、古文・漢文の設問が大幅に難化した。さらに、すべての大問の字数が増加したため、時間に追われた受験生が多かったであろう。

大問一の古文は、『寝ころび草』の一節。入試の出典としては稀である。昨年が比較的簡単だっただけに、難しく感じた受験生が多かったかもしれない。問一ノ二の第二段落の始まりを指摘する設問はとくに難しい。焦らずに本文を精読できたかで合否が分かれるだろう。

漢文は、問一ノ七のとが難しい。これまで漢文の学習をどれだけしてきたかで差がつくと思われる。

大問二は、言語論。「言語と人間との根源的關係」について述べられている。言語論は、多くの高校の教科書や予備校のテキストで取り上げられている頻出テーマの一つなので、読みやすかった受験生が多かったであろう。設問も、昨年のような時間のとられる整序問題がなくなり、標準レベルのものがほとんどなので高得点を狙いたい。本校では、夏期講習テキスト『ハイレベル現代文 / 早大難関大現代文』の〔四〕などで類似のテーマを扱った。

大問三は、「制度の土台にある概念」についての評論文。硬い文章で読みやすいとはいえない文章だが、設問は問三ノ一～問三ノ四はそれほど難しくなかった。問三ノ六は法学部特有の論述問題だが、昨年とは異なり、単に本文を要約するだけであった。意味段落ごとの主旨をきちんとつかんで読みすすめるれば、それほど苦戦はしなかったであろうと思われる。ただ、大問一の古文・漢文に時間がかかることを考えれば、しっかりとまとまった要約文を完成させた受験生は多くはないかもしれない。